厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
分担研究報告書

「WHO 統合国際診断面接第５版(CIDI 5.0)日本語版の活用における心理師との連携に関する研究」

分担研究者　　高橋美保（東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース　教授）

研究要旨

本研究では、CIDI5.0 を用いた連携が想定される専門家の一つとして、臨床心理学領域を背景とする心理職における活用可能性について検討した。心理職およびその養成課程にある臨床心理学コース在籍の学生・教員８名でフォーカスグループインタビューを行った結果、CIDI そのものの意義や実施について、標準化のメリット、実施者および受検者の負担の大きさも指摘された。また、機械的なやり取りを前提とすることから、心理職にとってはコミュニケーション上の違和感があることが示唆された。一方、活用可能性については、精神科へのリファー・精神科医療やリエゾンなどの医療領域での活用の他、教育領域、司法領域など各領域の多職種連携における活用可能性が挙げられた。また、心理職教育への活用の可能性と、それによる医療との連携のしやすさの向上が指摘された。さらに、精神疾患と身体疾患に関する大規模調査や、面接技法の研究での活用可能性など、研究における活用可能性も挙げられた。

心理職としては実施方法に関する違和感はあったが効果や意義は十分に理解された。また、活用可能性についても、主には精神科医療を意識したものであるが、精神科医療を必要とする他領域での活用可能性や、医療領域のコメディカルとして協働する心理職の教育、さらには研究での活用可能性があると考えられた。

A.研究目的

WHO 統合国際診断面接(Composite International Diagnostic Interview, CIDI)の第５版（CIDI5.0）は、応用範囲の拡大が期待され、精神保健に関する様々な専門家との連携を視野に入れた検討が必要となる。本論では、CIDI5.0 を用いた連携が想定される専門家の一つとして、臨床心理学領域を背景とする心理職における活用可能性について検討する。

B.研究方法

参加者：心理職およびその養成課程にある臨床心理学コース在籍の学生７名（博士課程３名・修士課程４名）・同教員１名

日時：2021 年７月 29 日（木）10-12 時

調査法：参加者全員が事前に研修の録画データを視聴した上で、グループフォーカスインタビューで議論を行った。さらに、議論を受けて各自の見解をレポートにまとめて提出した。

C.研究結果

１．CIDI そのものの意義や実施について

【標準化のメリット】

・他職種の実施の可能性

医師でなくても精神障害のアセスメント画できるという点で、他職種連携の観点から効果的であると考えられた。特に、情報（精神障害の既往・現在の症状、重症度、社会機能など）の検討漏れを極力避けながら診断に近いことができる可能性は意義があると考えられる。

・研究への活用可能性

アセスメント項目が非常に包括的で，取り逃がしがないため、研究にも用いやすい。まマニュアル化がしっかりしているため、大規模な調査研究に適していると考えらえる。

・診断の精度を高める

特定の精神疾患に限らず、精神症状を包括的に把握できるため、一部を抜粋して実施する場合に比べてより適切なアセスメントが可能になる。

また、面接者と直接コミュニケーションを取りながらインタビューで回答していくことか

ら、自己記入式の質問紙と比較して誤解が生まれるリスクが少なく、誠実に回答するモチベーションも高まるため、妥当性の高い結果が得られる。

【負担の大きさ】
・負担の大きさ
　調査員にとっても回答者にとっても負担が大きい。申し出がなくても休憩をとる必要性。
・妥当性への影響
回答者の集中力がどんどん落ちていくのではないか。診断名がある程度明確なら、該当する質問項目を抜粋して実施するというのが現実的である。
・実施上の問題
　事前に所要時間を予想しづらい点は運用しづらい。

【コミュニケーション上の違和感】
・無機質さ
　相槌などを入れても、無機質に何回も質問文を繰り返すことになると、相手が困惑したり、イライラしてしまったり、正しく回答をしなきゃという圧力を感じてしまうのではないかと思った。
・参加者のモチベーションの持続
　モチベーションの低下が予測される。CIDI の実施目的と方法について予め来談者に十分説明する必要がある。
・心理職は個々のクライエントに合わせて対応することに慣れており、予め定められた質問文の通りに発話して面接を進めることに対し、不慣れな感じや不自然さを覚えやすいため、心理職は構造化によって信頼性が担保されるという CIDI の特徴を十分理解し、回答者とのやりとりに留意する必要がある。
・アバターの可能性
　完全に構造化されたインタビューで、調査員に人間性を特に求めていないのであれば、むしろ逆にヒトとしての特徴を抹消したほうが、回答者への違和感が低くなると考えられる。オンラインだと調査員がアバターを使って面接をするという対応も有効かもしれない。あるいは、高度な言語識別能力を持つ AI を使って CIDI の面接をすることも将来的に可能かもしれない。

【内容について】
・内容の偏り
　いじめについて重点的に聞く項目が比較的多い一方で、発達障害に関する項目がない。

【適用可能性の限界】
・対象の限定性
　かなりの言語能力が求められるため、子どもや高齢者への適応可能性に限界がある。

２．研究・臨床応用の可能性
【各領域の多職種連携】
１）．医療
・心理から医療への連携
　心理援助機関に来訪したクライエントを医療機関へリファーする必要があると判断された場合に、心理職が CIDI を使って診断をすることができる。また、リファー先の精神科医も CIDI の結果を参考により正確な診断ができる。
　心理職が予診をする際には CIDI が役に立つ可能性があり、医師の診断にも役立つ。
　医療機関以外の相談機関への来談者における有病率を把握し、医療機関との連携について検討するために CIDI を活用できる。
　来談者における精神障害の有病率が高い場合、相談機関は医療機関との連携を強化する方針を立てることができる。複数の精神科クリニックとの提携や、医療機関と連携する際の手続きの整備など、円滑な連携に向けて準備することでより有効な支援につながる。
　CIDI の結果（＝客観情報）と本人の認識（＝主観的体験）とが異なっている場合に、現実検討力の程度をアセスメントできる。
・精神科で活かす
　精神科で働く心理職にとっては、CIDI のトレーニング経験が予診に役立てられ、予診の精度とスピードが向上し、効率が上がる。
　CIDI の結果を診断に直接活かせるなら、現場の医師の負担を減らすことができる。
　通院中の患者やデイケア通所者に対して、健康診断の要領で、項目を絞って定期的に実施す

ることで、健康状態を継続的に把握できる。効果評価の指標とすることで、支援を再考し、より適切な介入へとつなげることができる。

２）．リエゾン

身体疾患患者の有病率を把握し、有効なリエゾンの体制をつくるためにCIDIを活用できる可能性がある。

身体疾患で入院中の患者に対して心理職がCIDIを実施し、結果を集計することで、患者における有病率や多く見られる精神障害を把握できる。リエゾンに携わる人数や職種の決定に役立てられ、より有効なリエゾンの体制づくりにつながる。

３）．教育現場

SCが学校でCIDIを実施すれば，心理的不調を抱える子どもに対する早急な対応が可能になり、医師との連携もスムーズとなる。特に、いじめの項目がある点で親和性が高いと考えられる。一方で、発達障害に関する項目がない点が懸念される。

４）．司法領域

司法領域における大規模な調査に活用できる可能性がある。司法の現場で業務に携わる職員が全般的な傾向を理解しておくためにも，有効に活用できる可能性がある。

【使い方】

・集団利用の可能性

集団を対象としたスクリーニングテスト・定期検査として使えるかもしれないが、かなりの時間と労力が必要である。

・部分的活用の可能性

抜粋して部分的に使うことができると特定の診断ができるので臨床的には使いやすい。

・全部を使うことの意味

CIDIを全部使って一通りアセスメントすることで、より包括的なアセスメントができる。

・心理職が使うことの意味

心理士が活用することで、心理検査結果との整合性を確認することができる可能性がある。

【心理職教育への活用】

・心理職の育成

医療連携において心理職は何が求められているのかがわかる。心理アセスメントと医療診断としてのCIDIの異同から学べるものがある。

心理職を目指す学生の教育に使える可能性がある。査定面接を行うにあたって，どういった項目をどういった順番で問うていくべきなのか，理解が深まる。

経験が浅い心理職がクライエントに対して行う際に、情報を満遍なく収集し、重症度の観点からその相談機関が適切であるのか判断できるため、スクリーニングの機能になる。

【研究の活用】

ＣＩＤＩは網羅的な情報収集の方法である一方、コンテキストについては欠けてしまうため、心理職による面接と、CIDIによる調査とでは得られる情報にどのような差があるのかを、質的・量的に検討することができる。

心理職が伸ばしていくべき技能（強み；コンピテンシー）を明らかにできる。

また、リエゾンでの活用を発展させ、身体疾患と精神障害との関連を検討する研究を実施できる可能性がある。大規模な調査を実施し、身体疾患と精神障害の併存を検討することが考えられる。特定の身体疾患と併存しやすい精神障害が見出されれば、患者に対するその精神障害のスクリーニングが推奨され、精神障害の早期発見と治療につながる。

・回答の変化を記録することができれば、初診時と再診時を比較して治療効果を確認することができる。

D.考察

以上より、心理職としては実施方法に関する違和感が抱かれるところはあったが、効果や意義は十分に理解された。また、活用可能性についても、主には精神科医療を意識したものであるが、精神科医療を必要とする他領域での活用可能性や、医療領域のコメディカルとして協働する心理職の教育、さらには研究での活用可能性があると考えられた。

E.結果

CIDI5.0を用いた連携が想定される専門家の一つとして、臨床心理学領域を背景とする心理職における活用可能性について検討し、心理職の立場から、CIDIの活用性はあると考えられる。

F．健康危険情報

該当なし

G.研究発表

1.論文発表

該当なし

2.学会発表

該当なし

H．知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1.特許取得

該当なし

2 実用新案登録

該当なし

3.その他

該当なし